

〈特集：キューバ革命50周年／日本キューバ国交樹立80周年記念〉

日本・キューバ間の連帯の在り方

一日玖，玖米，日米の3角双方向で，友情ある真摯な説得を―

伊 高 浩 昭

私たち大方の日本人が，第2次世界大戦後にキューバという国の存在を強烈に認識したのは，キューバ革命から3年あまり経った1962年10月のキューバ核ミサイル危機の時でしょう。東西冷戦の真っ直中で，米ソ両大国が核戦争の瀬戸際まで進み，踏み止まった大事件でした。私は当時，ある大学のジャーナリズムコースでジャーナリストになるのを目指して学んでいましたが，スペイン語とラテンアメリカ情勢も勉強していました。

ここに同席しているハバナ大学のカルロス・アルスガライ教授のお父さんは，革命当時，日本駐在大使でした。その息子として教授も日本に住んでいたのです。そんな1959年7月，エルネスト・チェ・ゲバラが経済交渉のため，日本を訪問しました。高校1年生だった私は，残念ながら，当時，ゲバラ来日のニュースを読んだり聞いたりした記憶が定かではありません。キューバをはっきりと意識したのは，やはりミサイル危機からです。余談ですが，去年（2008年）5月に来日したゲバラの娘で医師のアレイダ・ゲバラは，父親が訪れた原爆の地・広島を訪れるなど父親の足跡を辿って，感激していました。

皆さんの多くが外国語大学の学生であるため，参考までに話すのですが，あのころ日本でスペイン語を学ぶ学生は，さほど多くはなく，私のいた大学は語学専門でなかったため，スペイン語は第2外国語の一つにすぎませんでした。私は，ラテンアメリカでスペイン語を使って取材するジャーナリストになろうと決めていましたから，スペイン語の言葉の収集や，耳を慣らすのに懸命でした。

当時，ソ連と中国が，競い合うようにラジオでラテンアメリカ向けのスペイン語放送を流していました。私は毎朝，ソ連と中国のその放送を，妨害電波か何かで消えそうになるのを，ダイヤルを少しずつ動かしては聴き続けながら，テープレコーダーに録音し，何度も聴いては，耳を慣らし，政治用語などを採集しました。家庭教師などのアルバイトを大いにやって資金を稼ぎ，当時としては上等な短波放送のラジオやテープレコーダーを買っていたのです。

この経験が，後に記者になってから，大いに役立ちました。また、『ビジョン(展望)』というニュース週刊誌を，高いお金を払って南米から毎週取り寄せて購読していました。これも役立ちました。しかし，私のスペイン語は今日まで一向にうまくなりません。かろうじて取材で使えるというだけのことです。

いまは，パソコンのウェブサイトで自由にラテンアメリカや世界のニュースを読み，現地と電子郵便（イメール）で交信できますが，あのころからしたら，夢のようです。私がラテンアメリカで取材していた時代の送信手段は，テレックスでした。黄色の細いテープに機械で穴を開けて，ローマ字原稿を電信化して送り，受け手が機械でローマ字に戻すという仕掛けです。その後は手作業で日本語の文章にします。ファクシミリもない時代で，記事を送るのに苦労しました。いつも軽い小型タイプライターを携帯し，ローマ字で原稿を書き，それを電信電話局に持ち込み，テレックスで東京に打電してもらっていました。もちろん，機械が使える場合は，自分でテープ

を作って記事を送っていました。

当時から今日まで四十数年間、私はラテンアメリカとりわけキューバと、ジャーナリズムの活動を通じて関わってきました。これから約1時間お話しする話の内容は、私が長らく仕事と勉強を通じて関わってきたキューバについての考察であり、それを踏まえて一つ意思表示をします。私たち日本人は、キューバにとっては異邦人です。しかし同時代に生きる者として、キューバとキューバ人の生き方に強い関心を抱かずにはいられません。そして、必要ならば、友情ある説得をすべきだと、私は考えます。もちろん、キューバ人からの友情ある説得にも耳を傾けなければなりません。

私は、キューバ革命を、「20世紀ラテンアメリカ最大の出来事」と位置づけています。なぜなら、1823年のモンロー宣言以来、ラテンアメリカを自分の支配圏、勢力圏と勝手に見なして、その通り、やりたい放題のことをしていたウサメリカ (USAMERICA) つまり米国の軛から敢然と離脱し、真の独立を果たしたからです。キューバは、1959年元日に成功した革命によって、本当の意味でラテンアメリカ最初の独立国になったのです。

その状態、つまり革命キューバが今も生き続けており、2010年元日で満51年になるのです。この半世紀あまりの間に革命キューバが果たした役割は、実に輝かしいものがあります。第一に、米国の影響力が国内でほとんど観られない独立国を築いたことです。ハバナ放送は、「米州で最初の自由の大地、キューバより」という言葉を、放送の枕詞にしていました。

1970年代初め、私が最初にキューバを訪れたころの話です。毎朝ホテルのベッドの枕元にチップとして1ドル程度を置く習慣が大方の外国社会にはありますね。ハバナのホテルで迎えた最初の朝、チップを置いたところ、仕事を終えて、その日の夕方、ホテルの部屋に戻ると、「お客さん、忘れ物です」と書かれた紙とともに1ドル札が置いてあったのです。次の日の朝も同じでした。そこで私は、チップを置くのをやめ、ホテルを出る日に、ボールペンのような小さな品物を、お礼として渡しました。すると、喜んで受け取ってくれました。私も、とても嬉しい気持ちになりました。すがすがしい気持ちでした。

ハバナの公園には、コペリアという有名なアイスクリーム店があります。日曜日に、そこに取材に行くと、若い恋人たちが長い行列をつくっていました。おしゃべりを楽しみながら、アイスクリームを買う順番が来るのを待っているのです。すると、ボーイフレンドと一緒にない娘さんがいました。私は、どうして一人なのですかと訊きました。娘さんは、「彼は遠くからやって来るので、そのうちここに着きます」と答えました。ふと見ると、彼女は首飾りをしていました。私はその瞬間、感動しました。その首飾りは、書類をとめるクリップをつなぎ合わせてできていたのです！私が気づいたのを見た娘さんは、「素敵でしょう？」と満面の笑顔で言いました。「ええ本当に素敵です。素晴らしい首飾りです」と私は答えました。私は、心を打たれました。娘さんの精一杯のおしゃれもさることながら、物質的に不自由な日常生活を、工夫して生きているキューバ人のたたずまいに感激したからです。

当時の私は、巨大なメキシコ市に住んでいましたから、どうしてもメキシコとキューバを比較しがちになっていたのですが、チップを受け取らないホテルの従業員といい、クリップの首飾りをした娘さんといい、資本主義社会メキシコと比べて、あまりに純粋なキューバ社会に驚き、心を洗われたのでした。あれから何十年も経ち、キューバ人の考え方もかなり変わっているようで

す。しかし、キューバ人の人間の良さ、優しさ、思いやりの気持などは昔も今も同じようです。年間3万人以上が自殺する日本の社会のような殺伐さのない、人間的な社会です。革命家チェ・ゲバラは、革命的な人間を「新しい人間」(オンブレ・ヌエボ)という言葉で表しました。日本、米国、ラテンアメリカ諸国などと比べて、特に当時のキューバは、「新しい人間」の呼吸が感じられる国だったと思います。

当時はヴェトナム戦争の最中でした。ある農場を訪れた折、私は、砂糖黍を刈る農業労働者たちから、日本はなぜ米軍を助けてヴェトナム侵略戦争に加担しているのか、と質問攻めにされました。私は、日米安保条約や沖縄の米軍基地の話をして、状況を説明することしかできませんでした。世界中でヴェトナム反戦運動が続いていた時代で、日本でもベ平連が頑張っていました。しかし私は記者として、戦争反対、暴力反対は口にしても、あの戦争で日本が悪いとか、米国が悪いとか、ヴェトナムが正しいとか、断定的に判断を下すことはできませんでした。ヴェトナムの現地、当時の南北両ヴェトナムの状況を全く知らなかったからです。ただし、何事に関しても当事者にならず、あるいは当事者になれず、「第三者」を決め込む、体のいい野次馬であるジャーナリストの習性が、早くも私の身についていたのも事実です。

1970年代初めのハバナ市では、個人商店は、ほとんどすべて閉鎖されており、どのショーウインドーも埃だらけでしたが、そこには子供の絵が飾られていました。幽霊街のような古い街並み全体が、子供の絵の画廊の連なりようになっていたのです。米国から敵視され、にらまれたキューバの経済状況の厳しさが、このショーウインドーの光景に象徴的に表れているようでした。

しかし、その後キューバは、当時のソ連諸国の経済相互援助機関であるコメコン、スペイン語ではカメと言いますが、これに加盟し、経済は息を吹き返します。政治面もソ連モデルを採用して、1970年代半ば、共産党を中心とした政治機構が整います。経済と政治の両面で安定したキューバは、革命の積極的側面を大いに発揮していきます。

有名な教育、医療・保健、食糧配給制度などの社会福祉面は充実していき、ラテンアメリカ諸国を含む発展途上国、第3世界諸国への医療援助や、それらの国々からの留学生受け入れも拡大していきました。これは、「国際主義」という言葉で表されます。それに携わる人々は「国際主義者」(インテルナシオナリスタ)です。日本に当てはめれば、青年海外協力隊の人々は国際主義者に該当するでしょう。さまざまなボランティア活動や、NGO活動を外国でやっている人々も国際主義者です。砂糖黍を刈る激しく、きつい仕事をしにキューバに行く世界中のボランティアの青年たちも国際主義者です。

文化面では新しい文学、映画、絵画、ポスター、演劇、バレエ、音楽などが次々に生まれ、文化革命が花咲きました。これは、特にラテンアメリカ諸国の文化に大きな影響を与えました。キューバ革命の最高指導者フィデル・カストロと、コロンビアのノーベル文学賞作家ガブリエル・ガルシア＝マルケスはほぼ同年配で、大親友同士ですが、ガルシア＝マルケスらラテンアメリカ諸国の作家たちが、キューバ革命の影響を受けたのは言うまでもないことでしょう。キューバの映画庁や映画学校で制作された新しい映画は、その一時代前のフランスの「ヌーヴェルヴァーグ(新しい波)」のように、世界中に旋風を巻き起こしました。

思想面では、カストロ主義やゲバラ主義の革命路線が拡がり、とくにラテンアメリカではさまざまな社会変革運動を生み出す原動力になりました。21世紀の今日、ラテンアメリカに増えた左翼政権、中道左翼政権が関心を呼んでいます。キューバ革命の影響を受けなかった進歩主義政

権は一つもありません。このようにキューバ革命ないし革命キューバは、とくに地元ラテンアメリカに政治と文化の両面で影響を及ぼし、ラテンアメリカのアイデンティティーの再発見に大きく貢献しました。

もし、ラテンアメリカが米国のような文化や社会になってしまったとしたら、ラテンアメリカの魅力は大きく失われてしまうでしょう。どこに行っても米国式英語がまかりとおり、米国のファッションやファストフードが幅を利かせ、街が米国人観光客で洪水のようにあふれたとしたら、うんざりするでしょう。今日、新自由主義（ネオリベラリズム）の市場経済のグローバル化などで、米国式の経済運営や金儲け主義、物質主義がすでにラテンアメリカのかなり広範な地域に拡がっており、その分、我々異邦人には、魅力が薄れています。しかし、まだまだラテンアメリカらしさが残っていますし、その良さを支えているのが域内の進歩主義諸国であり、その基盤にあるキューバ革命なのです。何事も米国式となると、文化や社会は保守化、右傾化して、陳腐なものに成り下がります。

日本社会や日本文化を考えても、米国式の文化や生活習慣が拡がりすぎて、辟易とすることがよくあります。日本社会にとって文化的にためになっているのは、日本の伝統文化が生きていることのほかに、アジア文化、欧州文化などが影響を維持していることによるでしょう。特筆したいのは、ラテンアメリカ諸国からの出稼ぎ労働者が1980年代後半から日本社会で急増した結果として、日本社会と文化の多様化が進んだことです。素晴らしいことですね。

キリスト教は日本では、明治時代から何か、知識階級や経済的に余裕のある人の多い宗教のような感じがありましたが、1980年代から流入したブラジル人、ペルー人らは生まれつきのカトリックです。彼ら人民大衆のカトリック信者が日曜ごとに日本の教会を埋めたことで、日本の教会の在り方そのものが変容を迫られたのです。いわば「本物の信者」が、日本の教会に変化を促したのです。在日キューバ人は多くはありませんが、音楽家や研究者として頭角を表しています。

かつて、「座頭市」という時代劇がありました。キューバでも、あのシリーズは大成功を取めました。ハバナの街を歩いていると、日本人は「イチャー」と声をかけられたものです。キューバ人に「座頭市」のどういうところが面白いのかと訊ねたところ、「たとえば山の中の一軒家で、女が風呂に入っていると。座頭市の連れの若者は、壁の隙間から風呂をのぞいて喜んでいる。そこで座頭市が俺にものぞかせろと言ってのぞくが、その瞬間〈見えねえ〉と言う。満場が大笑いする。こういうところが面白いのだ」という答えが返ってきました。

そこで私は当時の文化相だったアルマンド・ハルトにインタビューして、日本映画を輸入する狙いについて質問しました。すると文化相は、「キューバ人は米国映画、ハリウッド映画ばかり観て育った。われわれ革命政府は、世界には米国のスーパーマンやカウボーイだけでなく、さまざまな英雄がいる。座頭市もその一人だと。このような教育をするのも目的です」という説明をしてくれました。キューバもこのようにして、視野拡大と文化の多様性を図っていました。いまでも、その努力を続けています。

ラテンアメリカは、カトリック教会が強い影響力を持っている最大の地域ですが、教会は植民地時代から封建制度を支える頑迷な勢力でもありました。しかし1960年代半ば、全国各地のカトリック教会も、その総本山であるローマのバチカンも、キューバ革命の影響を受け、「解放の神学」（テオロヒア・デ・リベラシオン）の存在を認めざるを得なくなったのです。神は本来、貧しい人々のために社会を変えていくことを奨励するのだ、という画期的な思想を、多くの若い神父

や修道士たちが実践するようになりました。この教会革命を促したことも、キューバ革命の大きな功績の一つでしょう。

コロンビアでは、スペイン人の神父たちがキューバ革命に影響され、コロンビア人の大学生らとゲリラ組織をつくり、戦い始めました。裕福な家庭に生まれたコロンビア人神父カミーロ・トーレスも、この組織に入って戦い、死にました。彼らの「解放の神学」は、「革命の神学」にまで進んでしまっていたのです。

キューバの外国の革命への関与も「国際主義」の一環でした。チェ・ゲバラのコンゴやボリビアでの活動が有名です。ゲバラは死んでから、世界中で変革や正義のシンボルとなり、いまでも象徴的な影響力を維持しています。ゲバラは、キューバ革命の偉大な副産物であり、革命がキューバにもたらした最大のソフトウェアとすることができるでしょう。

キューバ革命が果たした外国での最大の業績は、1980年代末に、アフリカ南部のアンゴラの戦争で、革命政権の側で戦った延べ35万人のキューバ軍部隊が、反革命側で軍事介入していた南アフリカ軍を打ち破ったことです。これにより、南アフリカが不法占拠していたナミビアが独立し、南アフリカの悪名高かったアパルトヘイト（人種隔離）という名のひどい人種差別体制が崩壊したのです。キューバ軍は1961年4月、米国が組織したキューバ侵略軍部隊を撃破し、米国に勝ちました。米国は南アフリカ白人政権を支援していましたが、キューバによって今度は間接的な敗北を喫したわけです。

キューバ軍が導いた、アンゴラの勝利という世界史的な偉業の結果、マンデラ政権が生まれ、その後、南アフリカは2010年6月にサッカー・ワールドカップ大会を開けるほど、世界から認められる国になったのです。私は1980年代初め3年あまり、ヨハネスブルクに駐在し、植民地解放闘争や南アフリカ軍の横暴さを、取材を通じてよく知っていましたので、キューバが果たした役割の大きさを十分理解できるのです。

キューバがアフリカ南部で歴史的な役割を終えつつあったころ、ベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦は終わりました。この一大動乱期にあって、キューバの果たした役割は、国際社会で十分かつ正当な評価を受けることができませんでした。しかし、アンゴラ、ナミビア、南アフリカの人々が、キューバの偉業をいちばんよく知っています。キューバ軍が虐殺から救ったナミビア人の少女が成人して現在、キューバ駐在大使になっています。これは感動的な逸話です。

ベルリンの壁崩壊に至る1980年代は、キューバにとっても大変な年月でした。1980年に13万人もの大量のキューバ人が、経済難民として米国に去っていきました。キューバ人のなかに物質面などで不満が鬱積していたのも事実でしょう。やがてソ連に、若いミハイル・ゴルバチョフという指導者が登場します。ゴルバチョフは、ソ連社会が制度疲労し、社会主義体制が行き詰まろうとしていたのを察知し、「ペレストロイカ」という改革路線に着手し、その過程を「グラスノスティ」、すなわち透明化しました。その結末として、間もなく東欧社会主義諸国が消え、ソ連も消滅することになります。

最近、ゴルバチョフの下で外相を務めたシェワルナゼが語っていますが、ゴルバチョフもシェワルナゼも、ソ連は20世紀末までもつと考えていたということです。にもかかわらず、10年早く消えてしまったというのです。想定外だったのでしょうか。当時のフィデル・カストロ議長は、「あの偉大なソ連が消えてしまった」と、率直に驚き嘆きました。しかし、「だが今こそキューバは真

の独立国になる」と思い直し、革命キューバ最大の難局を乗り切っていました。

カストロ議長は、ゴルバチョフ政権が続いた1980年代後半、「レクティフィカシオン」、つまり「過ちを正す」という呼び名の「政策修正」政策を実行しました。このような早い手の打ち方が、窮地にあって、状況を切り開く鍵となりました。ベルリンの壁が崩壊した1989年には、北京の天安門で一大流血事件がありました。中国政府は、恥も外聞もかなぐり捨て、荒療治で社会主義体制の危機そのものを押しつぶしたのです。そのすぐ後、キューバでは、アンゴラ戦争の英雄だったオチョアという将軍ら数人が、「麻薬事件に関与した罪」ということで銃殺刑に処せられました。理由が何であれ、この衝撃的な処刑が、キューバ国内の反体制派あるいは反革命派に「見せしめ効果」を発揮したのは疑いなくでしょう。キューバも大変な時代を通過していたわけです。

革命体制は、権力闘争に勝ち続け国際社会の荒波を乗り切ったカストロ兄弟という、類い希な指導者の存在によって、またキューバ人が勤勉さを発揮して必死に頑張ったことによって、苦難の1990年代を乗り越え、21世紀へと進みました。しかし最高指導者カストロ議長は2006年7月末、腸内出血で大手術を受け、療養生活の後、昨年2008年2月、正式に議長の座を弟ラウル・カストロに譲りました。兄フィデルは83歳、弟ラウルは78歳です。他の指導者の多くも高齢者です。

革命から半世紀を経たキューバは今、年老いた指導部からより若い指導部へと、世代交代を急がねばならない時期にあります。また、平等性は実現しながら、豊かな工業化社会に向かう「経済離陸」と言わないまでも、経済水準を上昇させることのできない社会主義経済と、社会の構造的改革が急がれます。キューバ人の多くが、最良の体制と信じ選んできた社会主義体制の枠の中で、変えるべきものは変え、なくすべきものはなくし、加えるべきものは加える、という改革です。去年正式に兄フィデル・カストロ共産党第一書記から政権を引き継いだ、弟で共産党第二書記のラウル・カストロ議長は、現実的、実践的な政策をつくるよう心がけ、少しずつ改革を実行しつつあります。

革命キューバのかかえる大きな問題は、経済困難です。多くの発展途上国が今もうらやむ社会福祉を実現したキューバですが、1124万人のキューバ人の日常生活が、平均化されたまま、なかなか経済水準が向上しないのです。原因はいろいろあるでしょう。国内の改革はキューバ人が実行するでしょうし、内政干渉は許されません。しかし国外の問題は、キューバ人だけでは解決できません。

先日、キューバのブルーノ・ロドリゲス外相が来日し、鳩山政権に対し、経済封鎖をやめるよう、オバマ米政権に働きかけてほしいと訴えました。経済封鎖によって、キューバは、米国との経済関係だけでなく、米国の報復をおそれる第三国との経済関係を制限され、キューバが経済建設のために欲しい資金の融資の道も断たれています。革命によって米国から独立したキューバは、経済面で封じ込められるという仕打ちに遭っているのです。

日本の政府は、私たち日本人有権者が選んだものです。私たちは、有権者として、また日本人として、当事者の米国など国際社会の1%にも満たない数カ国だけが経済封鎖を支持している状況も踏まえて、米国に経済封鎖をすぐにやめるよう説得すべきなのです。

ところで、米国によるキューバ経済封鎖を、「経済制裁」と言ったり書いたりする日本人が多すぎます。公平に見て、キューバは米国から制裁されるいわれはありません。ましてや、〈テロ支援国家〉呼ばわりされるいわれはないでしょう。むしろ、さんざんキューバにテロ攻撃を仕掛け、

侵略を仕掛けた結果、キューバから「国家テロ」と指摘され、論理的に打ち負かされてきたのは、歴代の米政権なのです。ですから、「経済制裁」と書いて平気な新聞記者は、ナイーブです。ナイーブとは、ある物事に関して、正確な知識がないため間違いを犯してしまうといった意味の未熟さや純朴さを指す言葉です。ジャーナリストがナイーブであってはなりません。

かつてキューバ革命政府の重要な地位にあったカルロス＝ラファエル・ロドリゲスという優れた政治家がいました。日本に2回来て、日本側がキューバに貸しているお金の返済の交渉や、経済協力について日本政府と話し合ったのです。私は記者として2回ともロドリゲスにインタビューする機会を得ました。ロドリゲスは、その2度の機会に、「日本は独立国です。さらに一層独立国になるべきだ」と言いました。日本政府が、ワシントンの政府に気兼ねして、キューバと自由に経済関係を結ぶことができない当時の状況を見て、ロドリゲスは、私という記者を通じて日本社会に、「米国に対し、もっと毅然とした態度をとるべきだ」と訴えたのです。真面目で友情ある説得でした。

あれから歳月が経ち、現在の鳩山政権は、初めて米国に日米軍事同盟の在り方について異議を唱えました。つまり、沖縄の米軍基地の在り方を変えようと、主張し始めたのです。米国に異議を唱え孤高な生き方をしてきたキューバが、米国に従属してきた日本人にはまぶしくて仕方がないですね。そのキューバは、19世紀末から110年間も、グアンタナモ基地を米国に占領されています。キューバはずっと、グアンタナモ基地の返還を訴えてきました。日本の特に沖縄は、米軍の軍事植民地状態にあります。米軍基地がなくならないかぎり、日本の真の独立はありえないでしょう。

ところが日本のマスメディアは一斉にナイーブさを発揮して、米政府の立場や言い分に立って、日本政府の政策を批判する、極めておかしな報道を展開しています。安保条約や日米同盟の呪縛から抜けられない、日本の新聞記者、放送記者、評論家らがあまりにも多いのにあらためて驚きました。対米関係、特に対米軍事関係を根底から見直すことによって、21世紀の日本外交の正しい在り方が定まります。マスメディアがナイーブで、米国メディアのように振る舞うのでは、たまったものではありません。

キューバ政府は以前から、キューバが医師団を派遣し、日本側が医療機材や薬品を買う資金を提供し、天災などに遭った第三国で人道支援に当たるといった共同支援活動を日本政府に呼び掛けています。日本政府は何か理由があるのでしょうか、なかなか首を縦に振りません。このような支援活動は、大いにやればいいことです。今年は日本とキューバが外交関係を樹立した80周年に当たり、さまざまな記念行事が行なわれています。医療支援活動を共同で実施することを決めれば、最大の記念行事となったはずです。

1990年代に中米のホンジュラスに猛烈なハリケーン、つまり台風が上陸し、甚大な被害が出たことがあります。日本は自衛隊を派遣しましたが、自衛隊が現地に残した機材や医薬品を、キューバの医師団が救援活動に使った実績があると聞いております。このような関係を制度化し、最初から合意の下で協力態勢を固め、どこかの国で転変地変が起きたら、馳せ参じるという形にしようという、キューバからの提案です。日本が資金ないし薬品などを提供し、キューバ医師団がそれを使えば、どうしてもキューバの活躍が目立つことになるでしょう。ならば、医師団に日本人も加えるという工夫ができるでしょう。一度、実験的に試してみたらどうでしょう。前例のないことをするのも、外交です。

保守的な日本人に欠けているのは、前例のないことを敢えてする勇気と展望です。日本が本気

で国連安保理の常任理事国になりたいのならば、キューバのような第三世界で尊敬されている国と組んで、世界中の発展途上地域で人道支援活動をするのは大いに意味のあることです。米国に付かず離れず、という成熟した外交ができてもいいころでしょう。

さて、キューバ経済が国内的理由で停滞しているという事情を考えると、やはり社会主義経済体制の制度疲労が挙げられるでしょう。キューバは中国の「社会主義市場経済」方式や、ヴェトナムの「ドイモイ（刷新）」政策を参考にしながら、キューバ型の経済活性化方式を編み出そうと努力しています。しかし、長年続いた国家指導の経済の限界も見えています。言わば、経済が政治のようにイデオロギー支配を受けてきたため、思うように伸張できないという側面があるのではないかということです。

キューバは、米国には、社会主義体制をひっくり返して、昔のように米国の事実上の植民地のようなキューバに戻したいと本気で思っている者が少なからずいると警戒しています。もし、日本を含む広範な国際社会の圧力で、米国が理性的になり、社会主義キューバの存在と存続を正面から認めるようになれば、キューバは安心し余裕を持って、経済改革に乗り出すことができるようになるでしょう。自ずから政治面も変化するでしょう。

もう一つ、キューバ人とりわけ若い世代が渴望しているのは、「個人的な自由」の獲得のようです。これも、キューバという社会主義社会の存在が米国によって尊重されれば、「個人的自由」の問題も解決に向かうはずです。米ドルの自由化以降、生活格差が生じてはいるものの、世界各国と比べれば、経済と社会が平均化しているキューバは、米国との和解が実現すれば、経済が発展し、ひずみのより少ない、極めて理想的な国になるでしょう。このような意味で、キューバは今後も実験的社会であり続けると思います。米政府はいまや、発展のための「キューバモデル」を認めるべきなのです。

私や、私よりも上の世代は、戦時下や戦後の焼け野原や米軍占領下で育ったこともあってか、東西冷戦時代に、社会変革や革命という変化に憧れを抱き、特にキューバ革命を礼讃したものです。ある程度豊かな資本主義社会に居て、のほほんと生きながら、行動はせず、もっぱら革新思想を愛し、革命体制下で必死に頑張っているキューバ人に拍手と連帯の心を送って、それで済ましてしまう—ということになりがちです。いわゆる「サロン社会主義者」のスタイルです。これが、いわば流行していました。

それに比べて現代の日本人は、キューバに自転車を送ったり、ボランティア労働をしに行ったり、キューバの対米外交闘争に関与したりしています。いろいろな関与の仕方があるでしょうし、あってよいと思います。どんどんキューバに行って旅をし、見聞を広めつつ外貨を落とすのも意義あることでしょう。各部門の当局者も、陳腐な冷戦思考をかなぐり捨てるため、キューバを見聞すべきです。ただし出張でなく、個人資金で行くべきです。しかし最も重要なことは、キューバへの政策を和らげていくよう米国に訴えると同時に、日本政府と日本人に、キューバに対して経済関係を含め、自主的な接し方をするよう働きかけていくことです。少し前のことですが、キューバ側と発電機の売買交渉がほとんどまとまったところで、日本側の大手商社が米国の出方に気兼ねして、この商談を打ち切るという出来事がありました。キューバ側の落胆は、大変なものでした。

キューバに対して私たちはまた、いまの状況でも可能な改革を、政治、経済、社会などの面で進めるよう、最大限の友情と善意をもって働きかけることでしょう。褒め言葉、美辞麗句だけで

は、友情は深まりません。互いに痛いところまで話し合っこそ、親友になれるのです。かつて、カルロス＝ラファエル・ロドリゲスが私に言ったように、キューバの皆さんからも日本人に、遠慮なく何でも言ってほしいものです。このような接し方は、キューバに対してだけでなく、あらゆる国や友人に対して通用する普遍的なものだと思います。

キューバの最高権力機構は共産党です。今年開く予定だった第6回党大会はさまざまな理由で来年以降に延期されました。共産党大会が開かれれば、現在の指導部の後継世代の指導部が姿を現すかもしれません。その後継世代がどんな政策を掲げるのか、興味深いものがあります。キューバの内政問題は、すべてキューバ人が解決するでしょう。これほど確かで、わかりきったことはありません。

同じように、日本の内政問題は日本人が自主的に解決しますし、国際問題も、譲歩することに価値のある環境問題や人道問題などを別とすれば、日本人と日本の利益を優先させて解決すべきです。基地問題はその典型です。このように、キューバと米国の関係を観察していると、日米関係の在り方に示唆を与えてもらえるのです。

私の後に、キューバのフェルナンデス大使と、アルスガライ教授の講演があります。それぞれ内容の深い話になるでしょう。私の話は、この辺で切り上げます。私は、キューバにとっては異邦人のジャーナリストですが、長年、最大の職業的かつ人間的な関心を抱いてキューバ情勢に取り組んできた者として、ささやかな提言をしたつもりです。

きょう、この京都外国語大学のこの集いが、日本人とキューバ人の友情を一層深くし、何でも言い合えるような仲になるのに役立てば、と祈ります。米国の人々、友人たちに対して、キューバの立場、そして安保条約に縛られてきた日本人の立場を理解してもらえよう、新たな働き掛けを始めるきっかけになればいいと思います。

